



【第一夜】

シューベルト：ピアノ三重奏曲《ノットウルノ》

10分ほどの単一楽章の小品で、死の前年に書かれた。自筆譜には「アダージョ」と記されていることから、独立した作品ではなく、「ピアノ三重奏曲 第1番 D898」の緩徐楽章として構想されたが、採用されなかったのではないかと推測されている。イタリア語で「夜の」あるいは「夜想曲」を意味する《ノットウルノ》という表題は、シューベルトの死後、出版の際につけられたものだが、ロマンティックで甘美な作品内容をよく表わしている。

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第1番 より

1855年頃着手され、1861年秋に完成した、ブラームス20代後半の作品。初演は1861年11月にハンブルクで行なわれ、クララ・シューマンがピアニストを務めた。第1楽章はト短調のアレグロ。ほの暗い叙情に満ちた第1主題と輝かしい第2主題によるソナタ形式。激しい情熱を感じさせつつテーマを徹底的に展開・構成していく様子は、若きブラームスの面目躍如たるところ（この主題展開に感動したシェーンベルクは1937年、全曲にオーケストレーションを施した）。「間奏曲」と題された第2楽章はハ短調のスケルツォ。流麗な主部に快活なトリオが挟まれている。第3楽章は変ホ長調のアンダンテ・コン・モート。穏やかで叙情的な旋律美とリズムかつヒロイックに高揚する中間部の対比が鮮やか。「ジプシー風ロンド」と題された第4楽章はト短調のプレスト。カデンツァ後の盛り上がりが凄まじく、嵐のような熱狂とともに曲を閉じる。

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲

弦楽八重奏曲という編成は珍しく、そのなかではメンデルスゾーンの本作がもっとも有名で演奏機会も多い。1825年、メンデルスゾーン16歳の秋にわずかな期間で書き上げられ、1832年に改訂を施し、1842年に出版された。ヴァイオリン奏者で幼い頃からの友人でもあったエドゥアルト・リーツに捧げられた。

第1楽章は、勢いのある第1主題と柔らかな雰囲気のある第2主題によるソナタ形式。第2楽章は、大胆な転調を交えて展開する緩徐楽章。第3楽章は、ゲーテ『ファウスト』の「ワルプルギスの夜」の最後の語句に靈感を得たとされるスケルツォ。終楽章は、自由なフーガ形式によって大きなクライマックスを築き、力強く曲を閉じる。